

パネル・ディスカッション「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」報告

## 実践的唯物論論争について

牧野 広義 MAKINO, Hiroyoshi

### 1. マルクスらの「実践的唯物論」と

#### 戦前の唯物論研究会

マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』の中で、次のように述べた。「実践的唯物論者すなわち共産主義者にとって重要なことは、現存の世界を変革すること、眼前の事物を実践的に攻撃し、変えることである」。ここで述べられている「実践的唯物論者」という言葉が、その後、マルクス主義哲学を「実践的唯物論」と呼ぶ典拠となった。この言葉は、「世界の変革」を課題とするマルクス主義哲学の呼称にふさわしいものとして理解されてきた。

戦前の日本の「唯物論研究会」で活躍した戸坂潤や永田広志らも「実践的唯物論」を論じた。例えば戸坂潤は、『理想』主題号『唯物論か観念論か』（1933年8月）の冒頭の論文「実践的唯物論の哲学的基礎——物質と模写に関して——」で、「実践的唯物論というのが、マルクス主義哲学、即ち弁証法的唯物論を意味していることは言うまでもない」と述べている。そして、その哲学的基礎として物質と模写の問題を論じたのである。（その後、この論文は「物質と模写」という表題で戸坂潤『現代唯物論講話』に収録された。）

また、戦前の唯物論研究会では、マルクスの「フョイエルバッハに関するテーゼ」をめぐる論争が、船山信一、加藤正らの間で展開された。それは、第一テーゼにおける「これまでのすべての唯物論（フョイエルバッハのものも含めて）の主要な欠陥は、対象、現実、感性が、ただ客体または直観の形式のもとでのみとらえられて、感性的人間的活動、実践として、主体的にとらえられないことである」という言葉をめぐるものであった。こ

で問題になったのは、現実の対象を認識する主体の観点が「実践的」であることなのか、現実の対象を人間的・主体的実践の世界、すなわち人間社会に拡大することか、などであった。しかし、これらの解釈は不十分さを残し、この問題は戦後も引き続き議論された。

### 2. 戦後日本での「実践的唯物論」をめぐる論争

戦後の日本で「実践的唯物論」をめぐる議論は、特に1970年代以降、マルクスの主義哲学の性格や体系のあり方とかかわる仕方でも論じられた。その議論の背景には、スターリン『弁証法的唯物論と史的唯物論』などに代表される旧ソビエト哲学への批判、イタリアのグラムシの「実践の哲学」や旧ユーゴスラビアでのプラクシス派の哲学、旧東独での実践概念をめぐる論争とコージング編『マルクス主義哲学教科書』（1967年、藤野渉・秋間実訳1970-71年）の出版などがあつた。そして「実践的唯物論」をめぐる問題は、「哲学の根本問題」をどのようにとらえるかという問題とかかわって議論された。

マルクス主義哲学を「実践的唯物論」として主張する島田豊氏は、「マルクス主義哲学は、世界史を人間の労働による人間の創造過程として把握しながら、自然および社会を変革する実践的主体性の歴史的発展の諸内容を明らかにすることを主要な課題にしている」（島田豊「マルクス主義哲学とは何か」日本哲学会編『哲学』第22号、1972年）と論じた。こうして、マルクス主義哲学は実践的主体性の歴史的発展の哲学であるとされた。

また芝田進午氏は、哲学が成立するのは階級社会においてであり、ここでは「精神にたいして自

然が、意識にたいして物質が、形相にたいして質料が、人間にたいして自然が、理論にたいして実践が、第一次的であり、より根源的であると主張した哲学が唯物論であると論じた。そして階級社会が止揚されると哲学は止揚されるとされた(芝田進午『実践的唯物論の根本問題』1978年)。ここでは、「自然と精神との関係の問題」というエンゲルス以来の「哲学の根本問題」が相対化され、「実践と理論との関係の問題」が「哲学の根本問題」の一つとされ、またそれは階級社会におけるイデオロギー問題であるとされた。

さらに「実践的唯物論」を主張する論者の中からは、「哲学の根本問題」とは現実の人間の自由の問題、抑圧・差別の問題、平和と人類の生存の問題などに人間の精神的活動を組織するという問題であるという議論も行われた。

このような議論に対して、マルクス主義哲学を「実践的唯物論」としてとらえることに反対する議論も行われた。向井俊彦氏は、「いきなり実践を強調するまえに、唯物論の認識論が明確にされなければならない」と述べ、唯物論の主張においても「物質—労働—意識と歴史的にならべる」だけでは「独断的」になるとして、認識論の中での物質の根源性や、認識論の中への実践の導入が重要であるとした。そしてマルクスの「フォイエルバッハに関する第一テーゼ」の意味は、「対象、現実、感性を分析して、その基礎にどのような人間的・感性的活動があるかを認識すること」であるとされた。さらに向井氏は、人間の認識の能動性を実践の能動性から論じる戸坂潤らの「実践的唯物論」にも不十分さがあると批判した(向井俊彦『『実践的唯物論』が唯物論のマルクス主義的形態か』唯物論研究協会編『唯物論研究』第2号、1980年9月)。

### 3. 「実践的唯物論」論争の意義と課題

以上のような、「実践的唯物論」をめぐる論争をふり返って、私は次のような点にその意義があり、また課題が残されたと考える。

第一に、マルクス主義哲学の基本的性格について立ち入った議論が行われた。一方では、マルクス主義哲学の実践性が強調され、哲学が現実の問題に取り組むことがマルクス主義哲学の本質にかかわることが議論された。しかし他方では、マルクス主義哲学が現実の問題に取り組むといっても、それは直接の実践ではなく理論的課題としてであり、理論の基礎となる哲学理論、とりわけ認識論の重要性が強調された。

全国唯研の中では、この両者の意見の相違は埋まっていない。むしろ、現実の社会問題を重視して、「現代批判の哲学」ないし「ラジカルに哲学する」という方向と、認識論や弁証法、史的唯物論の基礎理論の研究などによって現代唯物論を発展させようという方向との分岐が見られる。しかし、以下でも見るように、両者を媒介する問題の探求も行われている。

第二に、「哲学の根本問題」の性格が問いつめられた。エンゲルスが『フォイエルバッハ論』で述べた「自然と精神との関係」や、レーニンが『唯物論と経験批判論』で述べた「物質と意識との関係」が、なぜ「哲学の根本問題」となるのかが改めて問われた。そして唯物論と観念論とを「哲学の根本問題」をめぐる対立としてとらえる場合も、その存在論的側面と認識論的側面とをどうとらえるのか、またその現実的・実践的意義とは何かが問われた。他方でまた、エンゲルスやレーニンのいう「哲学の根本問題」を根本問題と認めない場合、何が「哲学の根本問題」となるのかが問われた。

私見では、やはり物質(現実世界)と意識(精神)の問題が「哲学の根本問題」であって、それは認識論の問題を中軸とする世界観の問題であると思われる。またマルクスが論じたように、実践についてもその唯物論的把握と観念論的把握が対立しているのである。しかしこの問題も、現実の問題に即していっそうの解明が必要であると思われる。

第三に、マルクス自身の「実践的唯物論」や「フォイエルバッハに関するテーゼ」の意味が問われ

た。この点で、芝田進午氏は、先の向井俊彦氏の議論に反論する中で、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』ではなく、マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ」をマルクス主義唯物論の特徴付けととらえるべきであると述べた（芝田進午「学問的批判の課題と方法」『唯物論研究』第4号、1981年5月）。しかしここで芝田氏が強調したのは「観照的唯物論」の克服としての「実践的唯物論」ということであって、特に「第一テーゼ」の理解の深化は見られない。また先に見た向井氏の説明について言えば、現実の基礎に人間の実践があることを認識するだけでよいのか、マルクスの言う「革命的実践」はどこから出てくるのか、などの疑問も生じる。テーゼの理解のいっそうの深化が望まれる。

第三は、マルクス主義哲学にとっての実践と認識の意義と関係が問われた。この点で、「実践的唯物論」を主張する側からは、認識や真理の強調は、民主主義的实践が欠けた場合、真理の権威主義的な押しつけになるという批判も行われた。さらに、マルクスは「弁証法的唯物論」という言葉は使わなかったとして、マルクス主義哲学を「弁証法的唯物論」としてとらえることへの疑問も出された。他方で、認識論を強調する側からは、実践を強調するだけでは真に主体的な実践にはならず、民主主義的实践のためにも事実や真理にもとづく合意が必要であるとされた。先に見た向井氏からは、「実践の優位」の思想や、実践が認識の源泉であるという思想にも疑問が提示されている。

しかし私見では、マルクス主義哲学は「実践的唯物論」であるとともに「弁証法的唯物論」であり、現実世界の変革という「実践の優位」のもとで「理論と実践の統一」をはかるべきであると思われる（私見については拙著『現代唯物論の探求——理論と実践と価値』1998年、文理閣、参照）。

#### 4. 実践的唯物論論争以後の唯物論研究

1980年代以降、唯物論研究協会や各地の唯物論研究会の活動の中で、実践的唯物論論争が提起し

た問題をいっそう発展させる研究が行われてきた。

第一は、理論的かつ実践的問題である「自由論」の探求である。自由論については、すでに1970年代に、エンゲルスの「自由とは、必然性の認識に基づいてわれわれ自身ならびに外的自然を支配することである」という規定をめぐって、とりわけ市民的・政治的自由との関係などについて集中的に議論された。1980年代以降はさらに、「意志の自由」の唯物論的把握や、マルクスの「必然性の国」での自由と「自由の国」での「自己目的として認められる人間的な力の発展」という自由、そして労働時間の短縮による自由時間の獲得の意義などについても議論が行われてきた。また自由権・社会権・参政権を含む人権の唯物論的探求も行われている。

第二は、「反映論」や「意識論」の探求である。従来の「認識論」の枠を超えて、理性・感情・意志にわたる意識の働きや、意識と脳との関係などが探求されてきた。また意識の能動性をとらえるにあたって「反映論」はどこまで有効かという点での論争も行われた。しかし意識論、反映論においてもまだまだ課題を残している。

第三は、理論と実践を媒介する「価値論」の研究である。唯物論研究者による哲学的価値論の研究はすでに1970年代から提起されており、トゥガリノフ『価値とはなにか』（岩崎允胤訳、1979年）の翻訳も行われた。その後、価値論が盛んな中国のマルクス主義哲学者との交流もとおして、価値論の研究が進んでいる。

第四は、ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』の批判的検討などによって、「実践」も「認識」も問い直されてきた。実践といっても労働だけでなく社会的実践をどうとらえるか、コミュニケーションを実践や認識との関係でどうとらえるか、ハーバーマスの生活世界（コミュニケーション的行為の世界）とシステム（経済と国家）との二元論をどう克服するか、などが引き続き問われている。私見では、この問題についても、マルクスの言う「現実を实践として把握すること」や「現実的生活過程」の意味をいっそう深めるべ

きであると考ええる。

第五は、マルクス主義からのエコロジーの探求である。エコロジーの問題は焦眉の実践的問題であるとともに重要な理論的問題である。日本ではすでに1970年代からマルクスの「人間と自然との物質代謝」の理論が注目されてきたが、国際的にもエコ・マルクス主義の活発な理論展開が見られる。この分野での日本の唯物論研究者の旺盛な研究活動が進行している。

以上のような研究が、戦前の唯物論研究会以来の伝統である、哲学研究者と自然科学研究者や社会学者との共同によって、いっそう発展することを期待したい。